
猫とネズミと鈴とリボン

副官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫とネズミと鈴とりボン

【コード】

N3298W

【作者名】

副官

【あらすじ】

薄汚い裏路地でうっかり拾ったのは、猫なんかじゃなく、性質の悪い暮打ちだった。

1 (前書き)

自サイトからの転載です。

その人の名前を知ったのは、院生研修が終わったいつもの土曜日。院生の先輩（でも同い年）の庄治や岡と一緒にエレベータから降りた時。

「あ、進藤さん」

岡が棋院の入り口にいた人をそう呼んだ。

「「こんにちは」」

その場にいた院生はみんな挨拶した。院生成りたての俺は訳が分からずに、ただ皆にならって会釈したけれど。その人は俺に目をとめた。気のせいじゃなく。絶対。

軽く笑って挨拶を返したその人が見えなくなってから、俺は岡に聞いた。

「あの、今の人って誰？」

岡は、信じられない、と顔に書いて俺を見た。

「藤原！お前、進藤七段を知らないなんて！」

岡の声が大きくて、庄治や他の院生仲間も俺を振り返った。

「岡。しょーがねえよ。こいつ、タイトルもろくに知らねえんだから」

庄治が肩をすくめる。俺はむっとした。

「なんだよ。どーせ俺はモノを知らないよ」

春から中2になったとはいえ、まだ自分がコドモだってコトは骨身にしみて知っている。大人の保護者がいなければ、何もできない。誕生日は5月5日だし（違）。でも背は、クラスじゃ一番高いんだぜ。

「今のはプロの進藤ヒカル七段。若手じゃ塔矢八段と並んで一番の実力者だ。なにせ二十歳で本因坊と棋聖戦でリーグ入りしているんだ」

「今やってる本因坊リーグじゃ、次勝てば挑戦者決定戦だけ。すげえよ」

「でも、次は倉田九段相手だろ。もし勝っても挑戦者決定戦の相手は緒方十段。いくら進藤さんでも、そう簡単にはね」

「なにを！岡、お前進藤を応援しねえのかよ」

「そんなこと言っていない！進藤には頑張っで欲しいさ」

「お前、この前塔矢が進藤に負けたから、根に持ってんだろ」

「…！関係ないさ！そんなこと」

二人で喧嘩を始めてしまった。困って他の院生仲間を見ると、ほっとけ、と目で諭された。院生順位は1位と2位の二人だが、どうも盤外戦のほうが華やかだ。

俺たちはかなり騒がしく、日本棋院を後にした。

夜。俺はいつもどおり、グラスを磨きながら店番をしていた。狭いカウンター席が7席しかないバー。

親の店だが、飲んだくれのオヤジは酒に溺れて、体もココロもぼろぼろで。今は施設にいる。お袋はトウの昔に出て行った。今年高校をかなりユウシユウナセイセキで卒業した兄貴は奨学金を得てさつさと家を出た。結果、この店には俺しかない。

稼がなきゃ暮らしていけないのは身にしてみ分かってる。幸い、学校の時間とはかぶらない夜の店だし、この店は取締りの厳しい繁華街からは離れていることもあって、俺一人でやっても、何とかなった。

自分でも、俺はかなりスレた子供だと思う。

「お、いたいた」

カランカランとドアを鳴らして、その人が、来た。

「…いらっしやいませ」

この人は、いつもソルティ・ドッグしか頼まない。俺は注文も聞かず、グラスを準備した。

ドアの脇の出窓に置かれた碁盤。その人は自然に、パチ、と石を一つ置いた。来るたびに一手、進める。この盤面はこの先どうなるんだろう。

「院生研修、まじめにやってみたいだな」

いつもの、奥から二番目の席。

「…進藤七段、すごいらしいですね。本因坊の挑戦者も近いとか」俺が言うと、その人はにやっと笑った。いたずらが成功したみた

いに。

「おう。見てろよ。すぐに本因坊奪ってやるから」

「……進藤ヒカルも知らないのかと、散々言われた」

ことり、とカウンターにグラスを置く。

「知ってるだろ、お前。何言ってるんだ」

進藤ヒカルは、カラン、と氷を鳴らした。

「アンタ、名乗った覚え、あんのか？」

「そっぴや、ないな」

悪気も無く言われて、俺はため息を吐く。

「大体、なんて説明すればいいか。アンタのこと」

そう。この人との出会いは、人に、特に囲碁関係者に説明できるようなもんじゃない。

あれは2年前、俺が小6の時だった。

その頃は、オヤジも時々は店をやっていた。兄貴も手伝っていて、俺はよく店の掃除や買い出しをしていた。その時も、ミネラルウォーターだか何だかを買った帰りだった。

その人は、道端に転がっていた。遅くまで開いているスーパーの裏手に転がっている男なんて、本当ならシカトだ。前髪のメッシュも、ナイキの靴も。そこらのチンピラを思わせた。ただ、一つだけ、そうではないと感じたのは、手、だった。

きれいな指。きつとこの手は、人を殴ったり、物を盗んだり、そんな汚いことはしていない。

「…あのさ。春先とはいえ、夜は冷えるよ。帰るところがあるんなら、帰ったら？」

俺は、恐る恐る声をかけた。意識はあるらしいが、4月とはいえ、こんなところで夜を明かしたら、良くて風邪、悪ければ凍死もありえる。酔っ払いの相手は、オヤジで慣れている。オヤジは、お袋に

良く似た俺の顔を嫌って、酔うと必ず俺を殴った。

「人はさ、どうして生きるんだろうな？」

思いのほか、しつかりした声。

「……死にたくないから。じゃない？」

つい、つられて、するつと答えが口をついた。

そうすると、その人は顔を上げたのだ。きれいな目。意外と若い。

高1の兄貴より、少し上なくらいか。

「後ろ向きな答えだな。ガキのくせに」

「なんだよ。生きる意味なんて、ガキに聞いたのアンタじゃないか」

「それもそうか。なあ、この辺で酒飲めるところないか？…帰るところはないんだ」

付け足された言葉は、俺の最初の言葉に応えたんだと、後から気付いた。

うちの店に連れて行くと、兄貴が一人で店番をしていた。親父は、もうどこかへ行ったらしい。

「ソルティ・ドッグ、頼める？」

兄貴は、黙って塩とグラスをとり出した。

「この店、なんかいい感じだな。落ち着く」

「閑古鳥だからね。それでも物好きの常連が、何人かいるよ」

兄貴が無表情に答え、グラスをカウンターに置いた。コト、と音がする。

「このカウンター、カヤだ」

その人はなぜか、嬉しそうにそう言った。

「…未成年に、酒出して大丈夫？」

グラスを手にとってから、その人はいたずらっぽく聞いた。

「…未成年が店番する店だし」

兄貴はちよつとだけ笑って、そう言った。考えてみりゃ、ひどい店だ。

それから、この店に物好きの常連が一人増えた。

院生研修日。棋院に入ると、岡と庄治が興奮した声で話していた。
「おはよう」

声をかけると、二人はそろって言った。

「進藤が、倉田九段に勝った！」

その人は、週に2〜3回のペースで、店に来る。長居はしない。深酒もしない。

ある日、珍しくオヤジが店にいる時、カウンターのカヤの話になった。

「カヤの一枚板。すげーいい感じだ、これ」

「…昔の話ですが」
オヤジが何か語りだした。

「友人が、碁打ちでね。この店を始める時、カウンターはカヤが良いと。グラスを置いたとき、音が良いから、と言ってね。それで、少々値は張ったが、これにしたんです」

「こんなオヤジは、知らない。俺の知っている親父は、酔ってくだを巻くか、しよぼくれた背中ではグラスを磨くか。こんな静かな男は、知らない。」

「…その、友人、今は？」

「さてね、もう十何年か、会っていませんよ」

そういって、オヤジはカウンター裏で洗い物をしていた俺をチラッと見た。　なんだか、とてもイヤな感じがした。

出勤前のオネエサンが（この人も物好きの一人）会計をするのに入れ違いに、その人は来た。真つ赤な唇の投げキッスも軽く流し、

いつもの、奥から2番目の席に座る。

この一年で、もう何度繰り返したか分からない動作。

その人の前に、コトリ、と音をたてて、ソルティ・ドッグを置く。
「戦目は、緒方さんにしてやられたけどな。次はそうはいかない」
「なんだか、心中穏やかでは無さそうだ。こんな時は、黙っているに限る。」

「なあ、一局、打とうぜ？」

ほら来た。ここ2年、客としてのこの人を知っている。1年、暮打ちとしてのこの人を知っている。

「……容赦、ぐらい、してください」

「なに言ってるんだ。んなもん、するかよ」

俺が小学校を卒業するころ、オヤジはとうとう店を放り出した。兄貴は高校の勉強が忙しくなった。俺と違って成績の良い兄貴は、大学に進学する気らしい。大学に行きさえすれば、親父のようにはならないと思っっているらしかった。

俺は、一人で店をやることになった。幸い、背ばっかりはひよろつと高かった俺は、服装さえ気をつければ、バイトの高校生位には見えた。薄暗い店内は、上手く顔を隠してくれた。

その人は相変わらず頻繁に店に来た。もう一年になる。

「ソルティ・ドッグ」

「アンタ、いつもそれだね。たまには違うの飲んでみたら？」

いつもの奥から2番目。いつものカクテル。いつもと違ったのは、その人がカウンターに何か広げたこと。

「なに？それ」

他の客が相手だったら、絶対口にしなないことを俺は聞いた。

客の話は黙って聞く。客が話したそうなら、水を向けてやる。でも、自分から何か聞いちゃいけない。店に立つようになってから、兄貴に言われたこと。

「これ？棋譜」

しかし、その人は、興味を持たれたのがうれしい、という顔をした。"キフ"という言葉を、俺が分からない、という顔をする。

「囲碁の、記録」

と、付け足した。そうして、もう一つ、何かを広げる。

「これは碁盤。マグネットのおもちゃだけどな」

そういうと、そのおもちゃに、ぱちぱちと黒と白の磁石を置いていく。

…そういえば。

確か、まだ、どこかに。

「碁盤、あつたよな」

つい、つぶやくと、その人は顔を上げた。興味深そうに、先を期待するように、俺を見る。俺はろくに整理されていないロッカーの奥から、碁盤を引っ張り出すことになった。

「へえ。りっぱりっぱ。石は？」

埃まみれのそれを見せると、その人は綺麗に笑んだ。

「……石は、ない」

石は、随分昔に、捨てられた。嫌な記憶。思い出したくないものは、忘れてしまえばいいのに。

「そう、じゃ俺、今度石持ってくるからさ。これ、そこに置かない？」

そういつてドアの脇の出窓のわずかなスペースを指差す。

「あ、でもその前に」

その人は、太陽みたいに笑う。”一局、打たねえ？”

全く。傍若無人な客もいたもんだ。

「多少は打てんだろ？」

…何を根拠に、そんなことが分かる？

結局、碁盤はあつても、石が無いことに気付き（なんて基本的なコト！）、対局は次の機会に持ち越された。

次は絶対な！とその人は念を押して帰った。

子供の頃、よく碁を打った。教えてくれる人がいた。

それは知らない男の人だったが。

その頃は、まだオヤジも真面目に働いていた。俺はよく一人で公

園にいた。どこかに預けるような余裕は家にはなく、コドモが店をうろついていいはずもなく。夕方、一緒に遊んでいた子供たちがみんな帰ってしまっても、一人公園にいた。

そんな時、通りかかったオジサンが遊び相手をしてくれた。薄暗い公園に一人でいる子供を、哀れんだのか、何か他の目的があったのか、子供の俺には何もわからなかったが。ただ、相手をしてくれたことが嬉しかった。きゃっきゃ跳ね回る俺に、オジサンは足が悪いから運動をできないんだと、囲碁を教えて。俺が帰って良い時間になるまで、ずっとおもちゃの碁盤で碁を打った。

小学校に上がるころ、その人に会わなくなった。自然と、打つことも無くなった。

ある日、埃をかぶった碁盤を見つけた俺は、オヤジに言ったのだ。

『碁盤、家にあつたんだ。打とうよ、お父さん』

無邪気に言った俺に、オヤジは顔色を無くした。

『…お前、打てるのか』

『打てるよ？ねえ、相手して？』

オヤジは、いきなり気がふれたように、怒った。なんだかいろいろ言われたようだが、あんまり怖かったので覚えていない。石は、そのときぶちまけられ、捨てられた。

それから、オヤジは仕事をしなくなり、酒におぼれ、俺を殴った。囲碁は、俺の中で禁忌になった。

一回くらい緒方十段に負けたからって、俺にあたるな、と言いた
い。

若手のトップ、進藤七段と、院生が勝負になるものか。

全く、6つも年上のくせに、俺よりガキだ、このひと。

そう思って、苦笑した。この人が、大人らしいことをしたことが

あつたか？

「なんだよ、負けたくせに笑うなんて」

「アンタ、最初っから、ガキだったよなと思ってさ」

よく言えば、素直。心のまま、正直に行動する。とっくに成人してる癖に。

「…悪かったな」

歯切れが悪いのは、自覚があるからか。

「でもお前も、随分ヒネたガキだったぜ？」

あ、今もヒネたガキか。そういつて笑う。

「ガキが、ガキのまんまでいられる環境じゃなかったもんでね」

ふと、こぼれた俺の本音。しまった、と思う間もなく、その人は言った。

「でも、俺は。お前がお前で良かったよ」

言葉に詰まって、誤魔化すように墓石を片づけていると、その人は、繰り返した。

「お前が、お前で良かった」

珍しい時間に、その人に会った。会った、というより、見つけた。

「死にたいんか、アンタは」

早朝、ごみを両手に持った俺は、道端に転がっているその人に声をかけた。

「春先とはいえ、夜はまだ冷えるのに」

「おお、学ランじゃん」

「そりゃそうだ。登校前だし。」

「G・W・じゃないの？ガツコ休みじゃないの？」

「明日から休みだよ。今日はまだ平日」

「懐かしいな、ガツコ」

「様子がおかしい。声も擦れている。」

「帰るとこは？まだないの？」

その人は、一年前と同じ表情をして、頷いた。

ごみの代わりに、俺はその人を店に持って帰った。肩に担いで、荷物なみに運んでやった。……メチャクチャ軽い。

店の奥にある、狭い部屋。ここが俺の家。飲んだくれのオヤジと、兄貴のいるアパートには、もう長いこと帰っていない。(ひよつとしたら、兄貴ももうオヤジなんか見捨てて家を出たかも。)

その人の額に手を当てると、案の定、熱があつた。有無を言わさず服を脱がせ、俺のTシャツと短パンを着せた。学校指定の体操服が、意外に似合う。けど、服を脱がせて分かった。ガリガリに痩せている。背は俺より少し高いけど、これじゃ軽いはずだ。

「俺の布団だけど、我慢しなよ。ガツコ終わるまで、オトナシク寝てな」

言い置いて、出て行こうとすると、腕を掴まれた。

「…行くな」

手が熱い。熱が上がったのだろうか。

「一人に、しないで」

目の焦点も合っていない。これはやばいかも。

「…分かった。行かない。だから放して」

学校は今日からG・Wに決めた。(俺限定)

「行くな。…さい」

かすれた声で何事かつぶやく。誰を呼んでいる？

「行かない。どこにも」

繰り返し言い聞かせると、漸くその人は安心したように目を閉じた。

熱は随分高いようだった。でもここには体温計なんて気の利いたものも、風邪薬もない。氷で額を冷やすのが、俺にできる精一杯だ。それでも何度か、解けた氷を取り替えていると、容態も落ち着いたようだった。

気付くと、もう店を開ける時間だ。俺は、もう一度新しい氷に換えて、店に立った。

午前二時も過ぎ、数少ない常連が帰ると、もう客はいない。早めに店を閉め、奥の様子をうかがうと、その人は起きていた。

布団に横になり、目をあけて。…声も無く泣いていた。

「なあ。どうして俺は生きていて、あいつは消えたんだろう」

また、唐突な質問だ。そんな難しいこと、中1に聞くなよ。

「俺は知らない。それを知ってるのはアンタだけだ」

そもそも、あいつって誰だよ。と言いかけて、先に答えがわかった。さい、だ。

「…この次、石持ってきて、俺と打つんだろ。アンタが生きてい

るのは、次、の約束があるからだよ」

その人は、ゆっくり腕を上げて、涙を拭った。

「そつだ。約束がある」

普段のこの人からは考えられない弱った姿。始めて会った時も、そついえばこんなだった。春先に弱いのかな。世に言う5月病、とか。まだ4月だけだ。

「生きる気になったところで、これ」

作っておいたおかゆを出した。

「汗も随分かいただろ。ここには、薬なんて上等なもんはないから」「サンキユ」

結局、その人はG・Wの間ずっとここにいた。具合は二日目に良くなって、後はずっと奥でごろごろしていた。少しずつ、普段の朗らかさが戻ってきた。

いきなり対局しようと言ったのは5月5日。オレの誕生日だ。昼間フラッと出掛けたかと思ったら、碁石を持って帰ってきた。そして開口一番、対局。断る余地もない。

久しぶりに打つ碁は楽しかった。その人はメチャクチャ強かったけど。俺は一ひねりで負けたけど。子供の頃、公園で打った、あの空気を思い出した。

「へえ、お前結構やるじゃん」

「アンタに言われたくないよ」

次に5石おいて、また負けた。7石置いて、何とか勝負になった。それでも負けたけど。

「我流じゃないだろ。筋が良い。プロ目指せるよ。これなら」

楽しそうにその人が言う。そう言われると、それはとても楽しいことのように思えた。

「どうやってなるのか、知らないよ」

楽しそうだったが、簡単に乗せられるのも癪で、俺はそつぽをむいた。

その人はいろいろ教えてくれた。まず、院生になること。そしてプロ試験を受けること。院生になるにはどうするか。看病の礼だ、と言って、その人は暮を教えてくれた。院生試験まで鍛えてやる、と。

俺は、するつと耳に入ってきた言葉を反駁する。

『お前がお前で良かった』

なんだか、それだけのことなのに。

自分がスレて捻くれたガキだという自覚はある。

それでも。

心のどこかが、救われた。そう思った。

中1の秋には、置石は3つになった。これなら院生試験は楽勝だ、との太鼓判ももらった。

言われたとおりに書類を持って棋院に行ったら、結構すんなり受かった。

ひよつとしてあの人が実は権力持っていて、俺が受かるように何かしたのかも、と思ったのは、書類を受け付けた事務のひとが『ああ、あの』とでもいうような顔をしたからだ。

一番難関だったのは、保護者の同意ってやつだった。最近までも顔もあわせないオヤジに、院生試験に付き添えとは言いづらい。それでも、殴られる覚悟でオヤジに頼んだ。酔っていないときを見計らって、囲碁のプロを目指すと言った。

そうしたらオヤジは、拍子抜けするほど簡単に頷いた。

「血は争えない」

そう言われた意味は、うすうす知っていたけど。俺はそれ以上問い詰めなかったし、オヤジもそれ以上言わなかった。ただ、もう確実に、親子ではなくなったのだと思った。

冬から院生研修に通いだすと、実は俺は結構強いことがわかった。組も順位も上がった。Aクラスの12位までは直ぐだった。

そして、中2になった春。俺は上位クラスに上がり。

……あの人の名前を知った。

俺のプロ試験が始まった。予戦は免除だったから、本戦から。プロ試験の間も、店は開けた。俺の生活の糧だったし、進藤ヒカルは毎晩のように店に来たから。

「俺が鍛えてるんだから、受かれよな、絶対」

勝手に来て、勝手に相手をさせて、勝手なことを言う。この人は相変わらずだ。

「進藤本因坊に鍛えられているなんて、みんなには言えないよ」

盤上では白が圧倒的だ。俺の黒石は、押しに押されて息も絶え絶え。

少し、トホホ、な気分だ。庄治や岡は、どうやら進藤本因坊のファンらしい。確かに碁盤を前にすると、信じられないくらいびしっとするけど。

でも普段。碁が絡まないところでは。

ひょっとして、俺に対してだけなのか？ 出合いがあんなだったから、遠慮がなくなっているのか？

比較するものがないから、なんとも言えない。

それでも、今年の春は、進藤は5月病には、…なっただけ。前よりは軽かった。G・W・に俺のところに転がり込んで、だらだらしただけですんだ。…わがまま度は数倍アップしたが。

いずれは、きっと、5月も平気になるだろう。なっってくれなきゃ困る。

「お前さ、もうプロになるんだろ。この店、どうする気だよ」

進藤は、碁石をもてあそびながら、なんでもない事のように尋ねた。おい、落ちるコトは考えてないのか？

「ここを閉めたら、アンタどこで酒飲むのさ」

閉めることも考えた。でも、少なくとも続けられる限りは。

進藤の5月病が完治するまでは。

「それもそうだなー」

「笑って、進藤は、パチ、と石を置く。黒が、死んだ。……負けました」

連敗記録、更新。

カラン、とベルが鳴って、開いたドアから12月の冷えた空気が入り込んだ。

いつものように閑古鳥の店だが、さつきまでは進藤がいた。

「いらつしやいませ」

グレイのトレンチコートを厭味なく着こなした男。初めて見る客だ。年の頃は、進藤と同じくらいか。切れ長の目が印象的な、美青年だ。

「お好きな席にどうぞ」

その客は、ドアの脇に置かれた碁盤を見ていた。真剣なまなざしで、睨みつけるように。複雑な盤面。なのに。

その人は、一手、手を進めた。

「あ。」

進藤が一手づつ進めていた盤面。オレとの対局のために一旦崩しても、必ず元通りに作り上げていた棋譜が。

「あれ？いけなかったかな」

その客は柔らかな微笑んで、奥から2番目にすわった。

…後で戻しておこう。

「いいえ。かまいません。でもどうして？」

中盤の、複雑な盤面だ。プロだって、ぱっと見で次の手を置けるものじゃない。

「いつもね、ここの前を通るたびに、気になっていたんだ。出窓越しに見えるでしょう？この店も、だから気になっていてね。やっと今日来られたんだ」

進藤が置いた盤面が客寄せになるとは、思っても見なかった。

「ひよつとして、プロの方でしょうか」

俺はプロとしては来年の春からスタートだ。

だから、プロの顔もほとんど知らない。いや、威張れたことじゃないが。

「さてね。……ジントニツク、頼めるかな」

「かしこまりました」

はいはい。内緒なのね。

棚から数種類の酒を選び、背の高いグラスを用意する。

「あの盤面は、キミが？」

でもやつぱり気になるのか。

「いいえ。よくいらっしやるお客様が。来るたびに、一手づつ、進めていらっしやるんです」

「一人で？」

「石を置いていくのは、お一人です」

進藤が誰を相手に打っているのか、俺は知らない。ただ、きっと誰かを相手にしているんだろうとは思っていた。

「そう。キミも碁を打つの？」

その人の前に、ジントニツクのグラスを置いた。コトリ、と音をたてて。

「……このカウンター、カヤ？」

それを言い当てたのは、進藤に続き、二人目だ。

俺は薄く笑って、頷いた。

「打ちますけど、弱いです。連敗記録を更新中です」

進藤相手に黒星を積み上げている。数えるもの馬鹿らしいほどだ。

「そうなの？じゃあ、ボクと打って見ないか？」

俺はまず時計を見た。12時半。常連なら、すでに来た。この時間から新しい客はまず来ない。

碁盤を見る。さっきの一手。悪くない。どころか、鋭い一手だ。

あの一手が置けるなら、そうとうな腕だ。

プロ試験のあと、俺は進藤としか打っていない。他の人も打つてみたい。

「期待はずれになっては申し訳ないですが、それでも宜しければ」
一局、お願いします。
妙な流れで、初めての客と対局することになってしまった。

石を片づけて、碁盤をカウンターに置くと、その人はちょっと首をかしげたが、また元通りの盤面を作ると俺が説明すると頷いた。
お互いの実力もわからないので、互戦にした。俺が黒。

最初の十数手で、相手が進藤なみに強いことがわかった。綺麗な流れで、白石が並ぶ。派手さや奇抜さのない、穏やかだが力強い碁。進藤相手とは全く違うプレッシャーがある。

「：お強いですね。やはりプロでしたか」

「キミもね。薄暗くて、確信が持てなかったんだが、今年プロ試験に合格した一人じゃないか」

「え……？」

言い当てられて、俺は慌てた。俺の年もばれてる？店やってるのばれたらまずいか？

「院生の中学生3人が受かったと、週間囲碁で読んだよ。ああ、慌てなくていい。だからどうと言う気は無い」

その人は穏やかに、白石を置いた。

「石の筋はいい。面白い碁を打つな。師匠は誰？」

盤面が、だんだん苦しくなってきた。相手は余裕しゃくしゃくなのに。

「師匠は、知らないおじさんです」

院生の時から、聞かれたらこう答えていた。

「子供の頃、公園で知り合ったおじさん。名前も知らないけど、俺に碁を教えてくれたのは、その人です」

最近は、進藤だけど。でも進藤だとどうしても師匠という言葉が結びつかない。

「へえ。その小父さんとは、今も？」

「いいえ。小学校に上がる頃、会わなくなりました。……もう8年近く前になります」

8年、と、その人はつぶやく。なら、違うかな、と。

「……！なにか、思い当たる何かがあるんですか？」

思わず、立ち上がった。いた。

ひとつ、疑っていたことがある。

俺の本当の父親は。

あの、顔も覚えていない、公園のおじさんではないか。

「ああ、いや、違うんだ。きつと違うとおもっ」

俺の剣幕に驚いたのか、その人はゆっくり首を振った。

「いま、ボクが思い浮かべた人は、僕は直接面識はない。6年前に、一度対局したことがあるだけだ」

対局したのに、面識がない？

その人は説明した。インターネット囲碁というのがある。それで対局した、と。

「キミの筋が、似ているように思えた。もう一人、似ている人は知っているけれど、Saiの手筋には、キミのほうが似ている」

『さい』。聞き覚えがある。進藤が、例の5月病のときにつぶやいた名だ。

「…その、さい、という人は？」

「ネット上に現れた、最強の棋士だよ。Saiを知る誰尋ねても、そう言うだろう。当時最強と言われていた日本のトップ棋士にも勝った」

「そのさいは、プロじゃなかったんですか」

「違う。素性は、一切知られていないんだ。その棋士との対局を最後に、彼はネットから消えた」

「それが、6年前？」

「いや、それは5年前だな。5年前の春」

はる。春。春になると、決まっておかしくなる進藤。

さいの名をもらした進藤。

…どこかで、繋がっているのか…？

「…キミは、そのおじさんのことを、知りたいの？」

俺は、言葉に詰まった。しまった。そっちの話はまだ続いていた。「ひよっとして、プロの誰かかもしれないと思っています。もし、会えたら、と」

それも、確かに考えていたことだ。親父に聞けば早いのかも知れないが、できればそれはしたくない。ただ、顔を見て、あのころの礼を一言言いたかった。

「そう」

話している間にも、手は進んでいた。左下が生きれば、なんとか勝負になるんだが。

置かれた白石に、生きる道をふさがれた。

「……負けました」

「うん。途中、気が乱れたね。ここ、と、ここ。それがなければ、良い碁だった。まあ、話していた内容があれじゃあ、仕方ないだろう。次は話なんてしないで真剣に打とう」

次。うわあ。またくるのか。っつーか、この店って、何でこんな客ばっかり来るんだろう。

物好きって結構居るものだ。

その人（あ、その人つてのは、進藤じゃなく新顔の常連のこと）は言葉どおり、また来た。

「だが、この手じゃ、こう打たれたら後が苦しいだろう」

なんだかいろいろ教えてくれる。基本的に、親切なんだろう。

「うーん、こう来たら、こっちに逃げようかと思っただんですが……」
オレの曖昧な手を決して許さない厳しい人でもある。

「この場合、それじゃ甘い。ここで手を緩めたら、つけ込まれるだけだ」

ああ、困碁馬鹿がここにも一人……。進藤とどっちが上だろう。

「……そういえば。話は変わりますが、お名前を伺っても？」

オレは碁界に疎い。そりゃもう、岡や庄治に馬鹿にされるほど。同じ新初段なのに。

その人は、怪訝そうにオレを見た。

「あ、いや、別に話を反らそうとしたわけじゃなく。聞いちゃだめでしたか？」

あんまり不信な顔をされたから、逆に不安になった。

「いや。それは別にかまわないが。……名前を訊かれるというのも、そういえばあまり経験がない」

慌てたオレが可笑しかったのか、くすくす笑って、言う。うわ。

やっぱ、この人、綺麗だ。

「じゃあ、当分ボクの事は好きに呼んでいいよ。いずれ、いやでも

判ることだ」

「好きにつて……」

進藤といい、この人といい。棋士は名乗らないものなんだろう。でも、いずれわかるってことは、やっぱりプロ棋士の誰かなんだろう。しかも、きつと有名な。

「じゃあ、ジントニツク氏とも呼ばせていただきます」

「いいね、それ」

まだくすくす笑っているよ。結構笑い上戸かもしれない。

「ボクも聞きたい事はあるよ。あの盤面。打っているのは誰？」

これだ。ここに来るのも、それが目的だろう。……進藤の、棋譜。

「……ソルティ・ドッグ氏、といったところでしょか」

「ふうん。秘密なの？」

「ここに通いつめれば、きつと直ぐにわかりますよ」

につこり、営業用のスマイル。

実はこの人、常連のオネーサンたちにやたら受けがいい。頻繁に来ていたきたいものだ。

ちなみに、進藤はイマイチ敬遠されている。その理由は、厄介そうだから。女は鋭い。

「わかったよ。ソルティ・ドッグ氏と鉢合わせする幸運を待とう」

あーあ。やっぱりこういうところが、オネーサンにウケるんだろうな。余裕があるっていうのかな。進藤よりは確実に大人だ。

その人が帰った後、入れ違いに進藤が来た。まだ盤面が崩れたまままだ。

「あれ？打っていたのか？」

「さっきまでいたお客さんとね。すごい強いんだ。きつと、プロの誰かだと思うけど」

オレは言い訳するように、早口でいい、もとの棋譜を並べる。

「へえ。プロがこんなところに来るなんてな」

進藤も、白石を置くのを手伝ってくれた。

「こんなところ、は余計だ。その人、出窓から見える、この盤面が気になったって言ってたよ。客寄せになるとは思わなかった」

進藤の、石を置く手がわずかに止まった。

「……どんな奴だった？」

「んー。年は、アンタよりちょっと上かなあ。いや、見た感じ、同じ位かも。でも雰囲気落ち着いてるし。それにかなり強いよ、暮」

そうオレが言ったら、進藤は置いていた石を、逆に片付け始めた。「そいつと打ったんだろ？並べて見せるよ」

「なに、心当たり、あるの？」

あつてもおかしくは無い。むしろ、当然あるだろう。あれだけ強いから。

進藤は、オレが数十手も並べると、もう判ったようだった。

「ふーん。……あいつ、オレのこと、訊いた？」

「ああ。あの棋譜を打ってるの、誰かって。ソルティ・ドッグ氏だつて言つといたよ」

進藤はにやつと笑った。

「他には？」

「あとは、別に。前に来た時、ちよつと雑談して、んでお客の一人がああ盤面作ってるつて言つたくらいかな」

オレの手筋が、さいに似てるとか言われたけど。それは進藤についてのことじゃない。

「じゃあ、今後も黙つててくれな。あいつが来る時は、なるべく避けるし」

「なに。嫌いななの？」

そんなに嫌な感じの人じゃなかったけど。

「別に嫌いじゃないさ。でも、ここで鉢合わせはしたくない」
「ふうん？そういう人な訳ね。了解。」

あ、そういえば。

「なあ、名人つてどんな人？」

「あ？」

「なんか、今度、新初段シリーズう？とかってやるって、棋院から電話あつて。その対局相手が塔矢名人だって。だからさ」

そう言つと、進藤は吹き出していた。

「へえ、お、お前、め、名人と、やるの？」

なんだよ。その笑いは。

「だから、その名人つて、どんな人かつて聞いてんだよ」

ムツとしながら言つたオレに、進藤が目じりの涙を拭きながら（笑いすぎだ）応えた。

「強いぜー、名人は。どんな局面でも崩れない本格派の代表格だな。ご祝儀で勝たせてくれるようなことは絶対しないから、お前覚悟しとけよ」

うわ。やなこと聞いちゃったな。あ、でも。

「そういうアンタは？岡か庄治とはやらないの？一応、本因坊なんだろ？」

「あー、オレはパス。新初段には、あんまりいい思い出がないからなんだそれ。どういう理由だよ。」

進藤はその後一局打つて、帰つた。新初段シリーズまで鍛えてやる、といわれた対局は、中押し負け。ほんとに進藤は容赦が無い。

進藤とジントニック氏が鉢合わせする事は、その後もなかった。店に来る時間が微妙にずれているから、進藤が意識しずらしているんだろう。

例の棋譜は、途中から二人の対局に代わってしまった。来るたびに交互に一手進めている。対局と言うか、過去の棋譜をなぞっているんじゃないかと、オレは思っている。進藤の手筋が、あまり進藤っぽくない。しかし、自分のこと黙っとけと言ったくせに対局なんかして。実は仲いいんじゃないか？

とにかく、面倒な常連が増えてしまった。基本的に、複数客がいる事は少ないが、それにしたって唯一の従業員が暮ばっかりやっているわけにはいかないんだが。常識的に見える（進藤に比べて）ジントニック氏も、その点かなり非常識だ。いっそ、バーじゃなくて、暮会所にでもしてしまおうか。

そうこうするうちに、新初段シリーズの日が来てしまった。

珍しく緊張していたオレは、定刻より大分早く棋院に着いた。ロビーでは、既に岡と庄治が待ち構えていた。

「よう、さすがに早く来たな」

「なんだよ、庄治も、岡も。お前らの対局はまだ先だろ？」

「なんだってそろって居るんだ？」

そう聞いたオレに、二人はいつもの表情をした。オレの無知さ加減に呆れた顔。

「あのな。お前の応援に来てやったんだよ。少しはアリガタイと思え」

「へえ。そうなんだ。じゃあ、オレもお前らん時は応援に来るの？」
「……………お前の都合がよければ、来てくれ。勉強にもなるだろうからな」

岡は、肩をおとして、ため息混じりに言った。庄治は、言葉もないとばかりに首を振っている。

二人は、モニターのある部屋を見せてくれた。ここで二人は、オレの対局をみるのだと言う。自分の対局が写るだなんて、変な感じ。「まあ、塔矢名人相手なら、緊張するなって方が無理だけど、頑張れよ」

庄治が、激励のつもりか、背中をばんばん叩いた。結構痛いぞ、おい。

「塔矢と対局できるなんて、ホント、うらやましいよ。思いっきり打ってこいよ」

岡も、マジに激励してくれた。

だから、聞きそびれた。塔矢名人って、どんな人？

先に写真撮影があるから、と呼ばれた事務局で、オレはその塔矢名人と会った。

ジントニツク氏と。

ああ。そういうことなの。こんチクショウ。

「はじめまして。今日はよろしく」
にこやかに笑って手を差し出す名人が、なかなか様になるウィンをよこした。

「よろしく願います」

今日も黒星を積み上げることになるのか。トホホ。

……なんと、新初段シリーズは、白星だった。逆コミのハンデで、わずかに半目差で勝った。ってことは、互い戦なら大差で負けてるってことだが。でも記事は大健闘と讃えてくれたし、岡も庄治も内容を褒めてくれた。

でも、オレは不服がある。塔矢名人は、全然本気じゃなかった。

その夜、結果報告と一緒に、そう進藤に言ったら、大笑いされた。「ばっかだなあ、あいつがマジだろうと、そうじゃなからうと、勝ちちは勝ちだ。胸張つとけよ」

「でも、前にアンタが言っただろ。名人は、ご祝儀で勝たせてくれるようなことはしないって」

なのに結果がこれでは、腹をくくっていた分、肩透かしを食らったよな気になる。

「ああ。お前はマジだったってことか」

「そうだよ。大マジに挑んだのに。軽くかわされて、頭をなでられたよな気分だ」

「……お前、すごいなあ」

ぶすつくれるオレに、進藤が訳のわからないことを言った。

「？」

「いやー、お前、ひよつとして本気になった塔矢に勝つ気でいたんだろ」

「負ける気で対局する奴がいるもんか」

本気でそう言ったのに、進藤は盛大に笑い出した。

「すげえな、ホント。お前、やっぱ棋士が天職だよ。うん」

笑い続ける進藤に、オレは呆れた。怒る気にもなれない。

だから、笑う進藤の眼がいつもと違う色をしていたことに、気付かなかっただ。

春。オレのプロとしての生活が始まった。

実際、始まってみると、なんだか想像していたのと大分違って、拍子抜けした。もっといろいろ忙しいのかと思っていたから、月に二つ三つ程度のスケジュールってのは、意外だ。

そんな話を岡にしたら、また呆れられた。

「ばーか。毎日対局していたら、体が持たないだろ。それに、トーナメント勝ちあがって行ったら、増えてくるよ、対局も。それに、対局以外にも、記録係とかセミナーとかあるし。俺達はまだ学校があるから、考慮されてるだけさ」

そうなのか。でも、進藤とかも、別にメチャクチャ忙しくは無さそうだよな。塔矢名人も。だって、夜、店に来てるみたいだし。

店はまだ続けている。でも、今店に立つのは、オレじゃない。

ガチャガチャ、と鍵を鳴らす音が聞こえた。家主が帰ってきたのだ。

開いてるよ、とドア越しに声をかけると、進藤が薄手の上着を脱ぎながら入ってきた。

「なんだよ、まだ起きてたのか？中坊が」

それを言うのなら、自分こそ、だ。時計は3時を示している。ちなみに、午前だ。

オレが進藤のマンションに転がり込む事になったのは、やはり店に住み着いているのが問題だったからだ。

棋院に棋士として登録されるための書類を書いていたら、連絡先
のところで詰まった。オレの住所は、戸籍とかの書類上、あの誰も
いないアパートだ。とは言え、オヤジが施設に入った時に、アパー
トは解約している。こんなことがお役所にバレたら、オレは然るべ
き処置とやらで、今ごろどっかの施設にいるんだろう。いや、一応
兄がいるから、そっちかも。

とにかく、オレ自身にとってありがたい事だ。

そんなことを進藤に話したら、あれよあれよという間に、進藤の
マンションに同居することになってしまった。

ちよつと、びっくりした。

進藤にこんな（常識的な）措置が考えられるなんて。

「お前、オレの弟子ってことにしちゃえばいいじゃん」

なんとその通り、内弟子ってことで棋院を納得させてしまった。

しかも、親父に会いに行つて、保護者の許可まで得て。更に驚い
たことに、兄貴ともいつのまにか連絡を取っていた。

結果、父の店を取り仕切っているのは、今は兄だ。何だかんだ言
つても、親父のことを気にしていたらしい兄貴は、進藤がオレや店
のことを相談すると、進んで店を引き受けたいらしい。

正直、驚いた。あの親父や兄貴が、なんだか普通の家族みたいじ
やないか。

しかも進藤がそんな面倒事をちゃんと処理したつても、信じが
たい。

一応大人だったんだ、なんて奇妙な感心をした。

ともあれ、そんなこんなで。プロ棋士生活を始めるにあたって、
オレの環境は激変した。

朝、普通に学校に行つて。手合いの日は棋院に行つて。夜は店に
立つことなく、進藤のマンションで碁を打つ。

……環境は変わつても、やっつてゐることはあんまり変わらない気がする。

店の台所が、マンションの台所に変わったただけだ。オレは初めてここに来た日を思い出し、ため息をついた。

まるでモデルルームみたいなのに、生活感のないキッチン。冷蔵庫はペットボトル以外何もない。食器はマグカップ二つだけ。

その様子に呆れたオレに、今日からこの台所は好きに使っていい、なんて大上段に宣言してくれた進藤は、今やオレを専属料理人扱いしている。

「なあ、軽く食うもん、ない？」

午前3時に帰ってきた家主は、今も餌を待つ子犬の顔でオレを見る。

「お茶漬けならできるよ。明太子の」

…それを予想して起きてた、なんて、口が裂けても言わないが。

「あ、オレそれ好きー」

こんな顔見たら、これが本因坊だなんて、信じられないよな。

オレがキッチンに立つ間に、進藤は常にリビングにある碁盤に石を並べ始めた。

「それはー？」

背中越しに聞く。

「碁聖戦本戦。倉田9段対旗本9段」

FAXのコピーらしい紙を見ながら碁盤に石を並べている。

「勝ったのは？」

「白」

刻みねぎ、ちょっと多すぎたかな。まあ、進藤だし、いいか。

刻みねぎの分量に合わせて、白飯と明太子も増量。インスタントの出汁をかける。香の物を添えて。

こうしてオレはせっせと進藤に飯を食わせている。その甲斐あって、肋の浮いた腹も多少肉がついてきたようだ。

「お、うまそう。イタダキマス」

進藤は行儀良く手を合わせた。

「はい。どうぞ」

こんな簡単なものでも、喜んで食べてくれるから、作り甲斐がある。肌つやも健康的になってきたのが判るから、尚のこと。

「で、白はどっちさ？」

「んー、ハカモコクラン」

「旗本9段が勝ったんだ。倉田さんのこと苦手にしてたみたいなのに」

並んだ石は、まだまだ序盤。進藤が棋譜を寄越したから、続きはオレが並べた。

進藤は豪快にお茶漬けをかき込みながらも、時々箸で石を差す。行儀が良いんだか、悪いんだか。

「ここ、こつちなら、こう来て、こつ……二目、得してたる」

「あ、そうか。でもこつちじゃなくこつちは？」

「そんなとこじゃ、こつ……つぶれるだろ」

「うーん。じゃあ、こうなったら？」

「そつちも悪くないけど、倉田さん相手なら、ちよつと苦しい展開じゃん」

進藤はいちいちオレの考えを聞く。聞いて、ちゃんと答えてくれる。

師匠、という言葉は、どうにも進藤とは結びつかないのだが。先達、てものではあると思う。少なくとも、暮に關しては。

「あれ、お前そついえば明日学校じゃん？寝る寝る」

不意に進藤が時計を見てそつ言った。……やっぱり、忘れてる。

オレは時計の下のカレンダーを指差した。

「明日……ってか、もう今日だけど、祝日」

……そして、G・Wの始まり。

「ああ。……そうか」

進藤は、数回瞬きして、それからゆつくり目を伏せた。

春先に情緒不安定になる進藤は、この一ヶ月に限り、何とも無か

った。

それは、オレが転がり込むにあたり、雑事に忙殺されたからだ。だから。

面倒ごとが一段落して、そして明日からG・W・だという、今。どうなるのか、実はびくびくしているというのが、本音。

同居して、なんとなくわかったことがある。

進藤は、オレに強くなって欲しいんだ。それは、単に弟子にしたから、とかじゃなく。

……多分、誰かの代わりに。

電話が鳴っている。

休みの日なのに。

時計を見ると、午前9時。電話をするのに非常識な時間ではない。

メゾネットタイプの進藤のマンションでは、寝室は半地下で、一階がリビングダイニングになっている。電話を取るためには、階段を上がらなきゃいけない。

結局早朝まで検討していた俺たちは、新聞配達バイクの音を聞いてから、それぞれの寝室に引き上げた。だから、進藤がこの時間に起きるはずも無い。

俺は寝ぼけたまま、電話を取りに階段を上がった。

「進藤か？」

電話の相手は。俺の応答を聞く前に話し出す。

「休みだからって、いつまで寝てるんだよ。それよか、今夜暇か？
実はさ、聞いて驚け、奈瀬の奴がさー」

口を挟む余地が無い。

「なんと、できちゃった婚だとさー。相手は飯島なんだけど。まあ、それは当たり前か」

「あのっ」

いつまでも続きそうな一方的な会話に、覚悟を決めて、強い声で、

割り込んだ。

「あん？……あ、え？失礼！間違えました!？」

「いえ、あの、進藤で間違いないです。けど、本人、まだ寝てるので……」

「ああ、そうなんだ。…俺、和谷ですけど、…失礼ですけど、あなたは？」

「すごい、不信な声で聞かれた。あまりいい気はしない。

「あ、内弟子で……」

「うちでしー!？」

電話の向こうで叫ばれても、困る。

「内弟子って、弟子？進藤の？あいつが弟子とったのかよ、てか、一緒に住んでる?？」

「……はい。弟子で、一緒に住んでます」

「マジで？あいつ、俺たちは家に呼ばないくせに」

「マジです」

「なんだけ、一方的に責められている気がして、あまり愉快ではない。つい、ぶっきらぼうになってしまった応えに、相手は口調を和らげた。

「ああ、悪かった。ちょっと驚いたもんだから。…そうかー、あいつが内弟子ねえ……。年はいくつ?？」

「中3です。……今年から、プロになりました」

「わざわざ付け加えたのは、ちょっとムカついているから。

「ああ！ひよつとしてあの、新初段で塔矢に勝った!？」

「びっくり。知っているとは思わなかった。

「そうか。棋譜、見たよ。そうか、進藤の弟子なのか。…なら、さつさと上がって来いよ。楽しみにしてるぜ」

「あ、…はい。その、頑張ります」

「で、進藤のやつ、まだ寝てるって?？」

「…このテンポの早い会話はわざとか？切り替えが早すぎ。そういえば、和谷五段の棋譜もこんなだったっけ。

「寝たのが、朝方なので、まだ起きないと思います」

「んー、じゃあ、伝言、頼めるかな。夜6時に、駅前の居酒屋。奈瀬と飯島の簡単なお祝いするから。あいつら、式は挙げないんだとき。いつもと同じ顔ぶれだけだな、気持ちだけ、祝ってやるうってことになって。出欠は夕方までに俺の携帯にメールくれ。以上」

「はい。わかりました。起きたら、伝えます」

「おう、よろしく」

なんだか、突風みたいな電話だった。

壁のカレンダーを見る。進藤のスケジュールは書き込まれていない。進藤は、結構詰まっているらしいスケジュールの全部をこの壁掛けカレンダーのみで処理している。進藤いわく、これに書き込み切れないスケジュールはこなせないから、これでちょうど良いそうだ。

『p.m.6:00 エキマエ イザカヤ トモ』

とりあえず、付箋に書いて、カレンダーに貼り付けておく。4月29日に。

もつと寝ているつもりだったが、今更寝直す気になれず、簡単な朝食を作る。進藤が起きてきたら多分ランチにするから、その分の仕込みも。

コーヒーとベーコンエッグとトーストにサラダ。

典型的な朝食を食べながら、今朝方まで検討していた棋譜を眺めた。

進藤は、どこかでこの棋譜を検討してきたのだろう。きっと、塔矢名人と一緒に。俺に見せたときには、考え尽くしていたようだ。

あの二人の関係は、よくわからない。

時々、プライベートで打つらしい。時々、検討もするみたいだ。

なのに、碁以外では一切関わりがない。このマンションに塔矢名人がくることも、その逆もない。

友達、とは言わないよな。

でも。きっと。

進藤の5月病について、『何か』が一番知っているのは、塔矢アキラだ。

昼近くになつて、進藤が起きた。いつも起き抜けに冷たい水を飲む。

ダイニングテーブルの合板では、グラスを置いても良い音がしない。それが、俺としては微妙に不本意だ。

「朝、和谷さんから電話あつたよ」

台所から声を掛けると、進藤は水を一気飲みするところだった。返事を待たず、伝言を繰り返すと、うんとかあとか頷くのが見えた。まだ頭が働かないらしい。食後にでももう一度念を押すか。

朝仕込んでおいた中華粥に白髪ねぎをのせ、温泉卵を添えた。あとは、朝作つたサラダ。

進藤は、どうやら胃腸が弱い。というか、何も考えてない食生活の結果、疲労した胃腸がストライキしてるんだろう。朝なんかは、全く食欲がないらしい。拳句が、あの肋骨の浮いた腹つてとこか。別に俺が心配する筋合いじゃないとは思うが、この台所を任せられた身としては、つい、何とかする責任を感じてしまう。

「…いただきます」

寝ぼけながらも、進藤は、粥の椀を前に手を合わせる。

「はい。どうぞ」

箸使いも綺麗だ。こういう進藤の、意外に行儀の良い所は、俺がここで暮らすようになってから知った。店の常連で、やたら優雅な仕草のオネーサンが居て。…進藤の、ふとしたときの手の表情が、

あの優雅さを思い出させた。

進藤は、眠気を追い払うように、黙々と食べている。

まだ、去年や一昨年のような、不安定さは、ない。

俺は、肺に溜まっていた空気を吐き出した。進藤は、まだ、大丈夫。

不意に、自分がとても緊張していることに気づいた。

去年までは、別に進藤がどうなっても平気だったのに。いや、違うな。心構えもないうちに、否応無しに巻き込まれたから、考える暇がなかったんだ。

今年は。中途半端に進藤のことをわかっていて。そしてとても近くににいるから。

……痛々しい進藤を、見るのがこわい。

夕方。どうした訳か、俺は進藤と一緒に、居酒屋に居た。

気の置けない仲間でのお祝いだと聞いていたから、俺は当然留守番だと思っていたのに。

集まったのは、若手の実力者と言われている人たちだ。棋界関係者じゃない人もいるが、かつての仲間ではあるらしい。

主役の奈瀬三段は、女流棋士で、イベントなどでは引っぱりだこの人気棋士だと聞いた。相手の飯島さんは、かつての院生仲間で、今は総合商社のルーキーとして、年の半分は海外を飛び回るやり手らしい。

最初だけはお祝いらしく、二人に花束なんて渡していたけど。

盛り上がってくると、もうこの会の趣旨は何処へやら、ただの飲み会のノリになった。

俺は邪魔にならない隅でウーロン茶を飲みながら、当り障りのない会話に参加していた。

後ろでは、進藤が、主役の一人と話している。聞くともなしに聞こえる会話。

「…微妙に、信じらんねーな。できちゃった、っての」

オトコがオンナに言う台詞としてはそれはどうなの、と思う。奈瀬さんが怒らないといいけど。背中で冷や汗をかきながらも、聞こえない振りをする。

「んー。まあね。失敗したわけじゃないわよ」

……奈瀬さんがサバけた人で良かった。

「ふうん？……形がなきや、不安？」

嗚呼。今すぐ振り返って、進藤の口を塞ぎたい。

「言うわねー、アンタも。……不安は、そりやあるわよ。なんだかんだ言つて、飯島くん、しょっちゅう海外だし。でもね。結婚することにしたのは、それだけが理由じゃないわ」

なんだか、開き直ったとも聞こえる声。この二人、こんな突っ込んだ会話ができる間柄なのか。

「正直ね。アンタみたいに生きられたら、そりや幸せだろうけど、あたしにはしんどいと思ったの」

……今すぐ、聞こえないところに移動したい。そう思ったけど、根っこの生えた俺の足は、ぴくりともしなかった。

「……オレみたい、って？」

「気を悪くしないでほしいんだけど。…アンタはさ、塔矢もだけど、頂点を目指して、脇目も振らずまっしぐらじゃない。道は、ひたすらまっすぐ続いている感じなのよ。だけどあたしは、きっとそうじゃない。あたしは、どれだけまっすぐ歩いてても、アンタたちと同じ場所には、行けないのよ」

カラン、と氷を鳴らす音が聞こえた。

「女流棋士は、やっぱり棋士じゃないわ。そりや、上がって行けば棋士にはなるけど。でも、スタートが違えば、ゴールも違うのよ。それが見える。……それにね。世界は、碁だけじゃない。飯島くんは、もう碁以外の世界を見てるわ。碁を捨てたわけじゃないけど、それだけ、ではないの」

奈瀬さんは、これは逃げなのかもしれないけど、と前置きして、「あたしの世界も、黒と白以外が在ってもいいと思って。それが、

結婚の理由、かな」

「奈瀬は、…納得してるんだ？」

「しなきゃ、結婚なんてしないわ。ましてや子供もね。飯島くんともちゃんと話したわ。彼もわかってくれた。だから決めたのよ」

「そっか。…逃げ、なんて、オレは思わないよ」

「……ありがとう」

俺は、ウーロン茶が空になったのを言い訳に、席を立った。

進藤が今どんな顔をしているのか、視界に入らないようにして。

向こうでは、飯島さんが和谷五段にビールジョッキ一気飲みを迫られている。伊角五段がこっそり泡が大目のジョッキを渡していた。その横で枝豆をせっせと頬張っている福井という大学生は、プロ試験で対局した覚えがある。俺の空のグラスに気づいた本田四段が、追加を注文してくれた。

皆、とても楽しんでいる。一角で、あんな会話をしているも。

その二人も、今は越智七段相手に大笑いしていた。

やっぱり、みんなちゃんと大人なんだ。

酔っ払った進藤をタクシーに押し込んで、俺はみんなに頭を下げた。どうやら俺はこのために連れてこられたようだ。

「じゃな。そいつ、道端で寝ないように見張っててくれな」

「君がいてくれて助かったよ。進藤をよろしく頼むな」

「…はい。じゃあ、失礼します」

走り出したタクシーの窓から、皆がばらけて、駅や、大通りに向かうのが見えた。

大きな花束を抱えた二人のそばを走り抜けたとき、奈瀬さんが、確かに進藤を見たのがわかった。

一瞬のことで、その目に浮かんだ感情までは、わからなかった。

翌日。

いつもより少し遅い時間に起きた俺は、部屋に残るわずかな違和感に、慄然とした。

朝だというのに、進藤の靴が無い。

寝室はもぬけのカラ。携帯電話に電話したら、クローゼットの中から着メロが聞こえた。

進藤がいなくなった。

心のどこかで、やっぱり、とも思った。いつか来るぞと言われてビクビクしていた大地震がやっと来た、みたいな。少なくともこれで、X-dayに怯えることは、もうないのだ。

一先ず、心当たりを探そう。

俺の心当たりといえば、今は兄のいるあの店くらいしか、思い浮かばない。

着替えもそこそこに、とりあえず進藤の携帯電話だけはジーンズにねじ込み。玄関で靴をはいたとき、鍵や財布の必要性を思い出して取りに戻った。

「…深呼吸。冷静になれ。状況をよく見る。優先順位はどうだ」
呪文のように、俺は自分自身に言い聞かせた。

「先ず、電話だ」

店の電話番号を、震える指で押した。2回、押し間違った。まだ駄目だ。もつと落ち着け。

呼び出しコールを、半分祈るような気持ちで数える。早く出る。

『もしもし』

……兄の声だ。

「あ、兄貴？あの、そっちに進藤、行ってない？」

電話の向こうで、数秒の沈黙。

『……こんな時間から、いったい何だっというんだ。進藤さんなら、

一昨日か、その前くらいに来て以来は、見てない』

「そう……。近くに転がってたりしない？スーパーの裏とか、ごみ置

き場付近……いいや、俺行く」

『おい、どうしたって……』

返事を待たず、受話器を置いた。

ここから店まで、地下鉄を使えば30分。……自転車でも大差は無いかもしれない。

マウンテンバイクの鍵。財布。……あと、進藤の上着。

マンションの駐輪場でデイパックを背負いなおし、ついでに気合を入れなおし。

「絶対、見つけてやる。見つけて、うだうだするなって言ってやる」

店に、進藤はいなかった。初めて会ったスーパーの裏手も、ゴミ捨て場の近くにも。その辺の路地は隈なく走り回ったが、進藤は見つけられなかった。

俺は、改めて慄然とした。今まで、心の隅では高をくくっていたんだ。去年も、一昨年も、この時期進藤は店に来たから。今年もきつとそうだと。なのに。

俺の心当たりといえば、店しかない。他は、もうわからない。

店の前で、自転車の傍にしゃがみこんだ俺に、兄貴が水の入った

グラスを差し出した。

「この時間、兄貴はまだ寝ているはずだったのかもしいない。そうだよな。大学行って、深夜営業の店までやってるんだ。休日くらいゆっくり休みたいよな。」

「……………ありがとう」

「進藤さん、どうしたんだ？」

「…わからない。朝起きたら、いなかっただんだ」

「いままで、そういうこと、無かったのか」

「ない。大抵、大雑把な予定くらいは言ってたし、すれ違いのときもメモくらいはあった。留守電に伝言とか」

「一緒に住んでいたのはここ一ヶ月くらいだが。」

「ふうん。進藤さん、随分お前のこと心配してたんだな」

「……………？」

「お前は安心できたんだろ？」

「ああ。そうか。……………俺のためだったのか。」

「とりあえずメシ食って、それからだ」

「兄貴が、へたり込んでいた俺の腕を強引に掴んで引き上げた。」

そのとき、ポケットから能天気な着メロが聞こえた。

進藤の携帯。

慌てて取り出そうとして、持ったままだった空のグラスを取り落としてしまったけれど。兄貴が顔をしかめて粉々になった欠片を見ただけれど。

俺は携帯の画面を食い入るように見詰めた。

『塔矢アキラ』

どうして俺は新幹線のグリーン車になんか乗ってるんだ。

どうして塔矢名人が隣りにいるんだ。

どうして塔矢名人は進藤が広島にいと確信してるんだ。

どういっわけなんだ。

頭の中を疑問符がぐるぐるしている。

そのうちのいくつかは今隣に座っている人に聞けば答えが返ってくるかもしれないが。

こんな張り詰めた空気を纏う塔矢名人に、うかつに声はかけられない。

時間は少々遡る。

朝、進藤の携帯にかかって来た電話は、塔矢アキラからだった。

恐る恐る、俺が出てみた。

進藤が姿が見えないことを説明したら、俺に店で待機するよう指示した塔矢名人は、自身も棋院や暮会所などの心当たりをいくつかあたり、進藤の実家に連絡したらしい。

すべてに空振りした塔矢名人は店にいた俺を拾って、東京駅に向かった。

俺が訳もわからずにいる間に切符を二枚購入し、俺にろくすっぽ説明もしないまま、新幹線に飛び乗った。

それが、昼前のこと。

G・W・とはいえ本格的な連休前とあって、切符はすぐに買えた様だが、空きはグリーン車だけだったのだろうか。一銭も支払っていない俺としては、せめて自由席だったなら、と思うのだが。

尻の落ち着かないシートに座って、混乱した頭で、今朝までの事の成り行きを聞かれるままに答えた。そうしたら、塔矢名人は、進藤が広島にいると断言した。

心当たりがあるのか、と、俺は一瞬安堵したのだが。むこうで何処にいるかはわからない、と聞かされ啞然とした。

ならどうして地域は特定できるんだ。

俺が悶々としているうちに、新幹線は名古屋を過ぎた。広島って、あとどれくらいかかるんだろう？

「……………秀策だ」

ポツリ、と、塔矢名人が呟いた。

「以前にも、進藤は急に広島に行った事がある。ちょうど、この時期に」

「秀策って……………、本因坊？」

俺は秀策を知らなかった。進藤のマンションに居着いてから、進藤の大量の資料の中に、秀策を見つけた。ちゃんと出版された本以外にも、手書きの、何処からか写したとおぼしき棋譜が、幾つもあった。

「進藤は、秀策に並々ならぬ執着がある。……………進藤の謎の、一部だ」

謎？ さいのことか？ それとも、別の何か？

塔矢名人は、ながく、ゆっくり、息を吐いた。そうして、俺を見て、苦笑した。

「毎年、この時期にはなぜか調子を崩すんだ。それが、今年は何ともなかった。……………キミが居るおかげかとも思っていたんだが……………」

苦笑して、ゆっくり頭を振ると、また大きく息を吐いた。

「俺は、何にも……………。いつも、見てるだけしかできなかったし……………」

そう。毎年、見ているだけだった。俺が何かできるかもしれないなんて、己惚れでしかなかった。

「ボクには、見せもしなかつたんだよ。進藤は」

塔矢名人の端正な横顔が苦痛に耐えるように歪められるのを、俺は、正視できずに目を瞑った。

「……カケラは、見えるんだ。謎を解く、断片は。でも、それだけだった。キミが現われて、少し変わったと思った。いつもこの手をすり抜けて遠ざかる『進藤』が、ほんの少し、手繰り寄せられたと思った」

また、息を吐く気配。

「いいや。きつと捕まえてみせる。……キミという綱がある」

綱？ 俺が？ 『進藤』に繋がっているとでも言うのか。

「キミには悪いが、今回はボクに付き合ってもらつよ。今度こそ、掴まえなきゃならないんだ」

目をあけると、塔矢名人は遠くの一点を見据えていた。ここではない、どこか遠く。

その先に、進藤がいる。

やっと広島駅に着いた。

これからどうするのかと思って塔矢名人を見たら、彼もなんだかあたりをきよるきよる見渡していた。

これはひょっとして。

「……とりあえず、バス停ですか？ それともタクシーのほうが？」

塔矢名人も飛び出して来たんだった。準備も下調べも、しているはずも無い。

「そうだね。一先ず、……因島、かな」

目的地は『インノシマ』か。その地名が市町村のレベルなのか、もっとピンポイントなのかもわからない俺は、手取り早く駅員に聞いた。

「あー、因島ね。……広島まで来ちゃったら行き過ぎなんですよ。こだまなら新尾道に停まったけれど」

なんだと？

「……こっから何時間くらいかかるんでしょう？」

「急ぎますか？ 在来線とバス乗り継ぐ事考えると、車で行ったほうが早いかもしれないですよ」

レンタカーなら駅前にありますよ。

この情報を塔矢名人に伝えると、そく移動は車に決まった。

教えられた店に行くと、すぐに出せる車は一台しかないと言われた。塔矢名人はここでも即決だった。車も見ずに。

因島まではナビが案内してくれる。『秀策』で検索したら、記念館やゆかりの寺がいくつか見つかった。だから俺は助手席に座って、当面することが無い。

……勘弁して欲しい。

ゴールドデンウィークともなれば、確かにレンタカーも出払っているだろう。一台残っていただけでもラッキーだ。でも。

なんでそれがオープンカーなんだ。

営業用の笑顔で、気候もいいですしオープンにしておきましょうね、なんて余計なお世話をしてくれた店員は、絶対腹の中で宣伝効果を計算していたに違いない。ニューモデルのオープンカーで、ハンドルを握ってるのは見た目も心地よい青年となれば、信号待ちの度に好奇の視線に晒されるのは必然だ。

止むに止まれぬ事情があるんです。それもこれも進藤という困った男がしまして、そいつが急に姿をくらしやがったもので、俺とこちらサマとで探しに来る羽目になったのです。

嗚呼。せめて俺が隣の青年に釣合つくらい妙齢の美女だったら、聞かれもしない言い訳を頭の中で繰り返さずにすむのに。

にしても、くだらないこと考えてるよな、俺。所詮現実逃避なんだから、せめて明るいこと考えればいいのにな。俺の脳みそも役立たずだよ。」

空回りする思考に毒づきながら助手席で小さくなっていると、ポケットのなかで俺の携帯電話が震えた。

慌てて携帯を取り出す。塔矢名人も、息を呑んでこっちを見ていた。

「……違います」

進藤じゃない。岡だった。どうしてこんなタイミングでメールなんて。内容は他愛も無いことだった。今夜にでも返信しておこう。

能天気なメールのおかげで、張り詰めた空気が緩んだ。

「進藤が家を出たのは、多分早朝です。始発に乗ったとしたら昼には因島に着いているんじゃないでしょうか」

言葉にすると不安が募るが仕方ない。すれ違いとか、ひよっとして全然見当違いとか、言いたくは無いが見つからない可能性のほうがよっぽど高いんじゃないか？

「……というか、見つかるほうが奇跡って気が……」

なんで塔矢名人は進藤が見つかるなんて確信しているんだ。よくよく考えると、このヒトも進藤なみにぶっ飛んでいるよな。普段の物腰にごまかされるけど。

「まあ、ここでダメなら、ボクたちには彼は見つけれないだろうね。だけど、ボクはこうも思っている。……今が最後のチャンスじゃないか、ってね」

最後？ その言葉の持つ不穏な気配に、俺は息を飲んだ。

「ああ、そうじゃない。そういう意味じゃないよ。彼はまかり間違ってもそういう選択はしない。いくら春でもね。まだ神の一手に届いていないから」

車が高速道路の料金所に入った。俺はジリジリして話の続きを待ったけれど、車が走り出して、走行車線に合流しても、塔矢名人はそれ以上口を開かなかった。

目的地に着いた。秀策の墓のある神社だ。

記念館、と書かれた案内板があったが、要予約らしい。当然、しているはずも無い。

秀策の墓所は、見晴らしの良い斜面にあった。西に傾いた日差しが、穏やかな風景を彩っていた。でも、俺たちは観光に来たわけでも墓参りに来たわけでもない。

墓所には、人影も、誰かが最近来た形跡もなかった。

「……手を合わせておいで」

塔矢名人に促され、俺は過去の本因坊に黙祷した。

進藤が見つかりますように。

…ここは、暮が強くなりますように、のほろがふさわしいのかもしれないけれど。

俺には参らせたのに、塔矢名人は手を合わせることなく踵を返した。

「まだ一箇所目だ。次を当たろう」

カーナビで見つかった『秀策』は全て空振りだった。進藤らしき人物を見かけた人もいなかった。もう日が落ちて、オープンのままの車は寒いくらい。

「……今日は一先ずどこかに泊まるうか。駅前あたりまで戻れば、なにかあるだろう」

疲れた顔で、塔矢名人はハンドルに手をかけた。でも車は発進しない。東京を出たのが昼前。こっちに着いたのは夕方だ。日のあるうちに駆け足で何箇所も回ったのだから、そりゃ助手席に座っているだけの俺とは疲れ具合も違うだろう。でもきつと、それだけでもない。

「携帯で探しますよ。ちょっと待っていてください」

適当に地域で検索したら、ホテルも旅館もあった。にもかかわらず、空きは意外に少ない。

「……駅近くのホテルでいいですか？ツインかシングルか……あー、ツインしか空いてないや。一人8750円。これでいいですか？」

「ああ。ありがとう」

差し出した携帯の画面も見ずに、条件反射の礼。これは相当まいつてるな。

俺は黙って、カーナビの目的地をホテルに設定した。

愛想の無い音声ガイドが、一先ず車を方向転換しろと言っていたが、塔矢名人はまだ動かなかった。

どうしたものか考えあぐねていたら、携帯がなった。また岡かと思ってみると、兄貴の店のナンバーだった。

「兄貴？」

『…進藤さんな、今店に来たぞ』

「うええ！？」

『で、お前たちが飛び出していったことを話したら、『じゃ、オレも因島行くわ。今からなら今日中に着くだろ』って出て行った』

「うえあああ？」

『一応、進藤さんに俺の携帯持っていかせたから、そっちに連絡してくれ』

「おお、あ、ありがとう」

ようやく意味のある言葉を言えた。

『…普通に、元気そうだったぞ』

「あ、ああ、そう。そっか。うん」

俺が、無意味に頷いてる間に、電話は切れた。

っつーか、つまり俺の早とちり、ってことでしょうか。取り越し
苦労で大騒ぎしたんでしょうか。

恐る恐る隣を伺うと、まだ事情のわかっていない塔矢名人が早く
話せとばかりに目を怒らせていた。

「……すみません」

顔が整っている人は、怒った顔もまた整っている。迫力が3倍ましで、体感温度は氷点下だ。

「いいや。キミに怒っているんじゃない。キミは何も悪くない。今朝の状況で、キミが慌てるのは当然だろう。そしてここまでキミを連れてきたのはボクだ」

……じゃあそのブリザードの吹き荒れる先は。

「問題は進藤だ。なぜ彼が今からここに来る必要がある」

はい。そのとおりだと思います。

「そもそも、携帯も持たず、連絡手段もないままここに来たとして、どうやってボクたちに会うつもりだったんだ」

……あー、それはアナタが言える事じゃない気がします。

「あんな奴を心配してこんなところまでノコノコ来た自分にも腹が立つ」

……進藤。来ないほうがいいんじゃないのか？

進藤は、飄々と改札を抜けた。

仁王立ちする青年が待ち構えているのは見えていただろうに。

「よ、出迎えご苦労！」

「「……………」」

俺ともう一人の沈黙は、種類が違う。俺のは『呆然』と『安堵』。でももう一人の方は『怒りのあまり絶句』ってところだ。

「なあ、腹減らねえ？どっか飯食えるところ行こうぜ？」

「それならホテルのレストランに行こう。部屋はとってある」

逃がすものか、という気迫がひしひしと伝わってくる。なのに進藤は妙にご機嫌だった。

「おう。駅弁でも食べようかと思ってたら、もう売り切れてたんだよな。もうハラへって腹へって……………」

なんでこんなに上機嫌なんだろう。ナチュラルハイっていうか、不自然だ。

「……………これ、携帯。俺持ってきてちゃったから」

携帯を渡すと、進藤は軽く頷いて受け取った。

「……悪かったな。心配かけた」

よっぽど俺が情けない顔をしていたのか、進藤は苦笑して俺の頬をぺしぺし叩いた。謝るのかからかうのか一方にしてくれ。

「…ボクには一言も無しか？」

無然とした塔矢名人は、しかし謝罪の言葉を聞くより先に、駐車場に向かって踵を返した。

「ありゃ。怒ってんなー、めちゃくちゃ」

「……わかってるなら、ちゃんとしろよ。塔矢名人、今日一日ずっと緊張してたよ」

「ああ。わかってるよ」

結局、移動の車中でも、レストランで遅すぎる夕食を取っているときも、進藤は塔矢名人に謝らなかつた。塔矢名人も、それ以上何かを言うことも無く、表面上は冷静だった。

それでも、流石に気まずく思ったのか、進藤からバーラウンジに誘ったのが、もう日付も変わった頃。ちゃんとサイドボードにあるホテルの案内で営業時間を確認していたから、きつとギリギリまで飲んでくるのだろうと思った。

どんなことを話すのか。気にはなるが、多分俺が聞いていい話じゃない。

ツインの部屋に無理やり収まったエキストラベッド。身を投げ出すと、キイと一声軋んで沈黙した。

進藤が抱える何か。『さい』のこと。塔矢名人の思い。

そんなの、難しすぎてわかんねえよ。

思考を放棄すると、睡魔は直ぐに訪れた。

人の気配に、ぼんやり目を開けると、進藤たちが部屋に戻ってきたところだった。二人とも、足元がおぼつかないし、随分酒臭かった。二人がそのままベッドに倒れこんだので、俺も寝ぼけたまま再び目を閉じた。だから、あとから考えると、夢だったんじゃないかとも思う。

「……明日さー、秀策の墓参りいー行くぞー」

「…だから、それは誰と約束したんだと聞いている……」

「んーでえ、お前と、ずっと打って、打って、うって、……ずっとずっと、この道をお……」

「昔…来たことが、あるんだろう…」

「とらじろー、待ってるー」

「ふん、まだまだだろう……キミも、ボクも……」

「もー、オレ、ぜってー欲張ってー、手に入れるぞー」

「……話せ、しんどう……」

「宣戦布告だー」

「だれに……会いたい……んだ……」

「……オレがあ、かあつ……」

「……だれ、なんだ……」

翌朝、案の定二日酔いの二人は、ホテルのチェックアウトの時間までずっとベッドで唸っていた。

近くのドラッグストアで薬とミネラルウォーターを買ってきて二人に飲ませたけど、昨夜の内に一度吐かせておいたほうが良かったのかもしれない。後の祭りだ。

それでも進藤は、秀策の墓碑に行くといっって聞かなかったし、塔矢名人は自分でハンドルを握った。

昨日も来たところだけど、そのときは回りを見る余裕なんて無か

った。二度目は不思議と景色が綺麗に見える。今度はちゃんと墓前に花を添えて、昨日のお礼を心の中で言った。

進藤、無事に見つかりました。なんだか、俺が早とちりしただけみたいだったけれど。ありがとうございます。それと、暮が強くなりますように。

顔をあげると、進藤も塔矢名人も、真剣に手を合わせていた。二人の邪魔にならないようにそつと後ろに下がる。二人とも、しばらく微動だにしなかった。

「……よし、帰るか」

随分とさっぱりした顔で、進藤が言った。

随分久しぶりな気がする。見慣れた人ごみと林立する建物、晴れているのに薄灰の空。

改札を出ると、やっと重い荷物を降ろしたような安堵感を感じる。隣に進藤がいるからかもしれない。

「じゃあ、ボクはここで」

途中、塔矢名人が別れた。本当は今日一件仕事があったらしい。簡単な取材と言っていたけど、先方に無理を言って時間をずらしてもらったようだ。これから直接仕事に向かうのかと思うと、申し訳

ない気がする。

そう考えて背中を見送っていたら、頭を軽く小突かれた。

「気にするな。あいつは気にしてないんだからさ」

「……………アンタはちょっと気にした方がいいんじゃないのか？」

一体どうしてこの進藤とあの塔矢名人が親しいのか。塔矢名人がこと暮がらみでいろいろぶっ飛んだところがあるのは知っているけど、進藤はほぼ全てにおいてぶっ飛んでいる。塔矢名人の堪忍袋の緒は相当頑丈らしい。

「気にしてるぜ。だから、今度ウチ来いって言つといた。美味しい飯食わせるからって」

この場合、その美味しい飯を作るのは俺の役目だ。

「……………あ、そ」

あれ、そういえば。岡から来てたメール、忘れてたな。

「なあ、今度、同期の二人、呼んでいい？　なんか、徹夜で研究会だとかってメール来たんだけどさ。ダメなら、どっか他でやるし」

間借り人としちゃ、多分ダメだろうけど。

「おお。いーぞ。ただしオレもいる時にしろよ。同期って、お前と
同じ年の二人だろ。鍛えてやんぜ」

…あっさりOKが出た。てか条件まで出された。岡と庄治が泣いて喜びそうだな。

「じゃあ、そう返事しとく」

「今週末なら塔矢も来るぞ？」

……………岡と庄治が号泣して踊りだすかもしれない。

「……………」

進藤はどうやらすっかり本調子らしい。毎年の不調が嘘のようだ。

何かを吹っ切ったんだろうか。来年はどうなんだろう。

「あー、でも泊まるにしても布団がないな。よし、買ってくか」

「ええ？」

布団ってそんな気軽に買うものなのか？

進藤はさっさと歩き出している。

「布団って、どこで売ってる？ デパートまだ開いてるよな」

「ってか、買っても仕舞うところ、あるのかよ。高張るじゃん、布団」

「んー。押入れ、下半分空っぽだから、そこに入る分だけ。2、3組あればいいだろ」

「いや、そりゃ充分だろうけど、わざわざ岡たちのためになら、そんなことしないで…」

「これからは塔矢とか和谷とか、もしかしたら社とか来るかもしれないし。ま、いい機会だ」

ヤシロ？って誰？

「あー、他にいるもんあるかな。ついでに揃えとこっ」

「???? 客用のカップとか、グラスとか？」

「そんなんも必要か。他は？」

「とっさに思いつかない」

「まーいつか」

「ちよっ」

今まで、多分誰も呼んだことのない、進藤の家。進藤自身も、きつと寝るために帰るようなものだったのだろう。生活感の全く無いキッチンを思い出す。

あんなさびしい部屋に一人でいた進藤は、いったい何を思っていたんだろう。

塔矢名人を家に呼んだのは、じゃあどついう心境の変化なんだ。

……そもそも、俺を引き受けたのは、どうして。

うるさい。

いや、岡と庄治二人なら、十分予想できたことだ。

普段から喧嘩まがいな喧しい二人だが、それが二人のコミュニケーションなんだろう。だから、そこは別に驚かない。

いや、成長期のヤロウの胃袋つてのは、ちと予想外だったか。うん。そこは驚いた。俺の成長期は小学から中学くらいがピークだったらしく、最近は服も買い換える必要がない。これ以上伸びても鴨居に頭ぶつけるから、勘弁だけど。

ともあれ。

予想外だったのは、塔矢アキラだ。

俺が知ってるのは、店で姿勢良くカウンターに座る姿と、碁盤を挟んだ時のプレッシャーと。

よくよく考えてみれば、進藤と二人でいるところなんて、この前の失踪騒ぎのとき始めて見たんだ。

仲が良いんだらうと勝手に思っていた。

なんなんだよこの二人。怒鳴りあわなきゃ検討できないのか。

岡と庄治すら呆気にとられている。

「……岡。庄治。お茶入れるから運んで」

あんだけ怒鳴ってたなら、喉渴くдар。そう思って入れた温めの緑茶は、しかしぽかんとしてる二人に無視された。

仕方なく、急須の片づけを後回しにして湯飲みを運ぶ。喧々譁々と盤を挟む二人の間に、にゅ、と湯のみの盆を突き出すと、二人は何事も無かったかのように、それぞれ自分で湯飲みをとって、口元に運んだ。

「……ほら、お前らの分も」

完全に置きざりの二人にも湯飲みを渡して、ついでに俺も横に座る。

「……で、俺が飯の後片付けしてる間に、どこまで話が進んだの？」

さっきは確か、先の対局の検討をしていたはずだが。

「お前、ここ、こーなって、…こつ、こつ来て、で、次、どう思うよ」

ちよいちよいと、進藤が石を並べる。

さっきの、岡と庄治の早暮だ。

「んー……、こーなって、……こつち？」

「ほら見るよ、やーっばこっちだろうが！」

進藤が、我が意得たり、と立ち上がった。

「待て。それだと、こっ、……ほら、こっになるとどっする？」

塔矢名人が、違う読み筋を並べ、それを見ると、今の手が危ういものに見えた。

「ああー。……こー返して、こー……うん、苦しいかも」

納得して頷くと、今度は塔矢名人が満足げににやりと笑って進藤を見る。

「どうだ、進藤？」

「ちょ、おい庄治！お前も何か言え！ お前の勝ち筋だろ」

「え？ え、えと、……こっ、…とか？」

急に振られて、庄治がビクつきながらも指で指し示す。

「岡くん？ どう思う？」

今の手について、塔矢名人が岡に振った。

「う、その、なら、……こっちに……」

完全に飲まれてる二人には、進藤と塔矢の目つきが、蛙を睨む蛇

に見えてるんだろつ。

経験値の差で、これがただ視線を向けたただけだとわかっている俺にも、ガンつけてるように見えるんだから。

それでも、聞かれて答えられるのは相当な胆力だと思う。うん、すげえなこの二人。

「ばかこっちの筋読んでねえだろお前」

「甘い。この返しは考えたのか」

……案の定、瞬殺だった。

「……進藤、塔矢名人。新初段にそこまで言わなくても……」

「なに甘っこちよろいこと言ってんだ。盤挟んで相対すりゃ段位なんか関係ねえだろ」

俺にも返す刀が。

「……君たち、普段からいつも打ってる？」

塔矢名人が、岡と庄治に聞く。

「はい。しょっちゅう」

「だからか」

「そっか」

頷いた二人に、進藤と塔矢名人が一様に納得した。

なんだなんだ。

「お前ら、無意識に相手の手癖を読んてるだろ。だから、相手の苦手な打ち回しとか、深く考えずに選んでるんだな」

あ、そっか。

二人の対局を観戦すると、いつも思っていた。流石に相手のことを良くわかってる、と。

あれ、無意識だったのか。

……………それだけ、お互いを良く理解してるってことか。

岡と庄治は、言われた内容に絶句している。

「対局相手の傾向を知ることが重要だ。その意味では、二人とも相手の弱みを握っているとも言える。だが、無意識にではなく、意識して出来るようにならないと」

「だよなー。塔矢なんか、ここぞってときにエゲツナイ手打ってくるもんなー」

「えげつないって何だ。君の方がよほど厭らしい手を使うだろう」

今度は別のことで、進藤と塔矢名人が盛り上がっている。

もう、放っておこう。

空いた湯飲みを回収して、ついでに岡と庄治も引っ張って、キッチンに行った。

「どうせ徹夜覚悟なんだから。夜食に、握り飯作っておこう。握るくらいはできるんだろ。手伝え」

夕飯で空っぽになった炊飯器で、炊きなおした飯が、もう保温になっただけだった。

塩と海苔と、……鮭と、あと何があったかな。

二人を振り返ると、まだぼけっとならな。

「……風呂行って気分転換してくるか？」

考えてみれば、朝に来てから、飯を食う以外は、あの囲碁狂二人とずっと。そりゃ疲れるだろう。俺だって、進藤の家に暮らすようになった最初は、ペースに慣れるまで大変だった。四六時中囲碁なんだから。

「……俺、お前の手癖、読んでた？」

「無意識、って……」

あ。違った。疲れたんじゃない。

そうか。考えてみれば、二人は、囲碁付けという意味では、今までもずっと囲碁付きだ。

偶々暮の道に入った俺とは違う。院生ですつと鎬を削ってきた二人なんだから。

もともと俺とは、暮に対する姿勢からして、違う。

……うん。違うんだ。

「……ここは良いから、風呂、行けよ。さっぱりして来い。そしてら、あつちも、終わってるだろう」

なんとなく、……二人を、追い出した。

喧々諤々とやりあう二人を、単に、仲が良い、とだけ思っていた。

進藤と塔矢名人にしても。

そうじゃない。

そうじゃないんだ。

……もつと。

…もつと、なにか、深いものがあるんだ。

渡されたメモを見ながら辺りを確認すると、目印のコンビニを見付けた。

駅からここまで、殆どガイドのない大雑把な地図だけど要所は押さえてるらしい。と、微妙に感心した。

この素晴らしい地図で俺の家までたどり着け、と威張って紙切れを渡されたときにはどうしたものかと思っただが。

……結果的に、目印のコンビニから直ぐ見える、というはずの水色の屋根が一軒ではなく片手以上あって、一々表札を確かめて回ることになったのだが。4件目で『岡』を見つけたときには、地図の書き方、案内の仕方を一から教えてやりたくなった。

今日は、いつの間にか定例となっていた勉強会の2回目だそうた。庄治は午前中は用事があるらしく、俺だけで先に岡の家に来た。

……なんと言っか。

珍しく、俺は緊張しているらしい。

考えてみれば、トモダチのイエにおジャマする、なんて、今まで

一度もなかった。

先日塔矢名人に言われた一言。

『君はホストじゃないんだから』

水商売かと受け取りかけたが、彼の言う『host』は英語の意味合いで、つまりは『客を歓待する主』の方の意味だ。

どうやら俺は、岡や庄治に対しても、お持て成し、の態度を貫いていたらしい。

進藤の家だし、その意味ではホスト役は進藤だけど、俺は居候の身分で、それならできる仕事はやるのが普通だろう。が、俺の態度の基本が、接客モードなんだそうだ。誰に対しても。

微妙に、意味が解らない。

他人行儀だった、という意味だろうと解釈しているんだが。でも、言葉遣いは砕けていたはずだし、皿の片付けとか手伝わせたし、客に対する態度じゃないと思う。

でも、何となく大事なことを言われている気がする。喉の奥に小骨が刺さったみたいに、うっかり丸呑みもできず、引っかかったまま。

だって今まで、友達とか仲間とか、そんなものに縁が無かった。

俺の家が、普通じゃない環境だったことは知っている。普通、酒

も出す店を中学生一人が任されるなんて在り得ないだろう。

詮索されたくない。だから、誰とも深く付き合わなかった。余裕が無かったし、そんな気もなかった。

必要最低限で済ませていて、それで問題なかった。

そもそも進藤だって塔矢名人だって、客からスタートだ。そう簡単に態度を変えられるはずも無いじゃないか。

………どういふ態度で接したらいいのか、まるで解らなくなった。

岡や庄治は、そう言うところがいい意味で無頓着で、俺の無愛想も気にせずガンガン来る。

今日だってそうだ。いつの間にか、次は岡の家と決まっていた、他に用もなかったから断りもできなくてなし崩しに約束していた。約束したからには来るのが当たり前だと、頼りないメモ片手にウロウロして。

そして、今、岡の妹らしき少女相手に、うるたえている。

「おにいちゃんはでかけています。すぐかえるから、おともがきたらあがってもらってまわって行っていいってました」

小学生低学年だろう少女は棒読みで一息に言うと、無造作に階段を指差した。

「……ええと、じゃあ、お邪魔します。岡の部屋があっちってこと

でいいのかな？」

こくん、と頷く少女に内心冷や汗をかきながら、恐る恐る玄関に入り、靴を脱いだ。

じいっと大きい目で見詰められて、戸惑う。

「じゃ、じゃあ、俺、部屋で待ってるから」

そそくさと示された部屋のほうへ行こうとすると、なぜか服をつかまれた。

無言で、ただ服をつかんで。

でも丸い黒い目が、何かを言っている。

「……今まで、テレビ見てたの？」

岡の妹は、こっくりと頷いた。

「じゃあ、一緒に見ようか。名前、教えてくれる？」

しゃがんで、目線を合わせると、妹は初めて笑みらしき表情になった。

美少女が変身して戦うアニメを三話分見終わる頃、岡が帰ってきた。庄治も一緒だ。

「おー、来てたか！」

コンビニの袋を両手に二つ三つぶら下げている。

「来てたかじゃねえよ。直ぐ帰るって、お前の直ぐは何時間だ」

妹一人留守番でどここのコンビニまで行ってきたんだ。

「わりい、待たせたか。途中で、ついでに昼メシとかアレコレ買おうって思いついて」

庄治も、横で頷く。

「うん。そんで俺が電話して、合流したからさ」

「俺じゃない。こんな小さい妹一人残して何やってんだよ」

あっけらかんとした岡の物言いに、なぜか酷く腹が立った。黙ってDVDを片付けている妹が、その様子が手馴れているように見える。

「や、でもこいつ、留守番慣れてるし。なあ？」

困惑したように、岡が妹に同意を求める。

「言わせるなよ！ 大丈夫って言うに決まってるんだろ！」

思わず叫んで、自分で驚いた。

どうしたってんだ。なんで、こんな、イライラするんだ。

岡と庄治が、目を丸くしている。DVDをしまった妹が、首をか
しげて俺を見る。

「……………わりい。ちょっと混乱してる。今日は帰る」

岡と庄治の顔が、見られなかった。返事も待たずに、玄関を飛び
出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3298w/>

猫とネズミと鈴とりボン

2011年11月4日15時15分発行